

平成27年(2015)1月15日

編集・発行
書学書道史学会
会報委員会

〒166-8531
東京都杉並区和田3-30-22
大学生協学会支援センター内
TEL : (03) 5307-1175

FAX : (03) 5307-1196

メールアドレス：
shogaku@univcoop.or.jp

第二十五回 書学書道史学会大会を終えて

下野 健児



九月十三日、十四日の二日間にわたり花園大学自適館において、第二十五回書学書道史学会大会が開催されました。通例では十一月に開催されていた

大会を、九月という時期に変更させていただいたにもかかわらず、百名を超えるご参加をいただきました。この場をお借りして、あらためて厚くお礼申し上げます。また、九月開催であったために参加できなかった方々には、心よりお詫び申し上げます。本学の諸々の事情により、休暇中でなければ会場の確保ができなかったことが、開催時期を変更させていただいた理由です。誠に申し訳ありませんでした。

本大会では、総会・研究発表の他に、萱のり子氏のコーディネートによるシンポジウム「伝承と生成のかたち―書学書道史と芸術諸学―」と特別展示「禅の書画」を企画いたしました。初日に行われたシンポジウムでは、芸術の歴史に

おいて「何が受け継がれ何が姿を変えたのか」というテーマのもと、まず、音楽の領域から輪島裕介先生(大阪大学)、文学の領域から土田耕督先生(日本学術振興会・国際日本文化研究センター)、書の領域から本会会員の河内利治氏(大東文化大学)、下野健児(花園大学)が基調提案を行い、その後、会場からのアンケートをもとに活発な質疑応答が行われました。我々の思考は書の領域にのみ固まってしまうがちですが、他の領域からのお二方のお話は、参加された会員諸氏、特に若い研究者の方々にとって、書を考える上で大きな刺激になったのではないかと思います。シンポジウムの詳細については、萱のり子氏からの報告をご参照ください。

本学歴史博物館にお願いして行った特別展示では、白隠をはじめとする禅画、墨跡を出品してもらいました。二日目には同館学芸員による展示品解説があり、会員諸氏に少しでも、本学の建学精神である「禅」に触れていただけたのではないかと思います。

研究発表では初日に柳田さやか氏・高城弘一氏、二日目に古木誠彦氏・栗躍崇氏・大嶋英里氏・根本知氏・川内佑毅氏・高木義隆氏・根来孝明氏の九名の方が日頃の研究成果を発表されました。内容は日本、中国それぞれバラエティに富んだ意欲的なもので、発表者それぞれの視点から様々な問題が提起されました。発表後の質疑応答も活発に行われ、発表者、参加者ともに実のある時間を過ごせたのではないかと思います。発表内容については、事前配布された大会レジュメをご参照ください。

今大会は事務局からのお話をうけて急遽お引き受けした訳ですが、昨年度の跡見学園女子大学同様、本学も専任教員一人で大学院生がいけないという状況の上、規模が小さく施設等が十分でないために、前述のようにやむをえず九月開催ということになりました。九月の京都の暑さのなか、ご参加くださいました会員諸氏にはいろいろとご不便をおかけしたことを思います。重ねてお詫び申し上げます。

大会運営にあたっては、大阪教育大学の萱先生はじめ院生、学生の皆様に多大なご協力をいただきました。本学書道コースの学生も大会準備から後片付けまで献身的に働いてくれました。また、幹事役員をはじめ学会関係諸氏にも様々な面でお世話になりました。皆様のご協力のおかげで無事に大会を終えることができました。ありがとうございました。

シンポジウム「伝承と生成のかたち―書学書道史と芸術諸学―」

コーディネーター 萱 のり子

今回のシンポジウムでは、「伝承と生成のかたち」をテーマとして多様な芸術現象にふれ、ここから改めて書や書学のあり方について考える企画としました。

趣旨説明のあと、第一部では、音楽・文学・書のジャンルから計四件の基調報告が行われました。ジャンルや領域は枠づけとしてはなく、伝承と生成について考える際の目安として捉えていきます。

輪島裕介氏の「音楽における痕跡：楽譜と録音の文化的諸問題」では、まず音楽を「痕跡」とみなしうるのは時代的に二二〇〇年に過ぎないことから説き起こされ、西洋近代の芸術観との関係で成立してきた「作品」としての音楽や、聴覚文化として音楽を捉える近年の研究―「行為」としての音楽―などが紹介され、「何が音楽か」を考える機会をいただきました。

土田耕督氏の「連歌における歌」とばネットワークの継承と応用―藤原為家の歌論と二条良基の連歌論をめぐって―では、和歌における「本歌取」という手法がどのような考えに基づいて行われ、またどのようなときに新しい和歌だと評価されるの



か、について具体的な歌例をひいて述べていただきました。「古歌再利用」という捉え方は、書が伝承される構造と重ね合わせられる視点が得られました。

河内利治氏の「人文学と芸術学の研究環境の変化―一九九〇年代以後の海外における書学研究の視座から―」では、最新の研究動向を紹介しながら書学が関わりあう学問領域とそれらの区分立ての基準などについて提示いただきました。

下野健児氏の『書のかたち』をめぐって「では、書は運筆の軌跡によつてはじめて「かたち」をなすこと、その「かたち」は時代や文化が異なることでどのように感受されるのかについて、具体的な筆跡を例にして提起されました。

第一部終了後、会場の方々からの質問や意見をもとに、第二部での全体討議に移りました。

「ジャンルが異なっているが、かたちの中の何を受け継いだのかを考えることができた」「それぞれのジャンルにおいて〈古典〉を学ぶ意義に関心がわいた」「作り手と受け手の問題がどの分野にもあると感じた」などをはじめ、音楽や文学の特色を知ることや書について改めて考えてみる糸口ができたように思われます。当日は紹介しきれないほど多数の意見・質問が寄せられ、会場の熱気が高まりました。今後につなげることができるよう、はからっていく予定です。

ご参加いただいた皆様にお礼を申し上げます。



平成25年度 会計決算報告書		
	項 目	決 算 額
収 入 の 部	個人会員会費	2,793,000
	団体賛助会費	400,000
	その他の収入	634,350
	前年度繰越金	6,175,393
	合 計	10,002,743
支 出 の 部	編集局経費	576,485
	国際局経費	0
	国内局経費	486,072
	学術局経費	2,420
	研究局経費	0
	会報編集委経費	0
	ホームページ委経費	378,840
	事務局経費	
	謝金手当	0
	会議費	9,456
	荷造送料	280,522
	遠隔地役員交通費	140,000
	普及広報費	0
	選管費	124,700
	印刷費	0
	通信費	3,630
	事務消耗品費	0
事務委託費	663,600	
人件費	0	
諸学会費	0	
特別費用	0	
予備費	0	
	次年度繰越金	7,337,018
	合 計	10,002,743

平成26年度 会計予算報告書		
	項 目	予 算 額
収 入 の 部	個人会員会費	3,000,000
	団体賛助会費	100,000
	その他の収入	30,000
	前年度繰越金	7,337,018
	合 計	10,467,018
支 出 の 部	編集局経費	700,000
	「学会展望」準備費	100,000
	国際局経費	300,000
	国内局経費	300,000
	大会運営費	200,000
	大会準備費	100,000
	学術局経費	200,000
	研究局経費	500,000
	《会報》編集委経費	30,000
	ホームページ委経費	300,000
	事務局経費	
	会議費	30,000
	荷造送料	400,000
	遠隔地役員交通費	400,000
	選管費	0
	通信費	10,000
	事務消耗品費	10,000
事務委託費	700,000	
人件費	100,000	
諸学会費	10,000	
	予備費/繰越金	6,077,018
	合 計	10,467,018

- ▽平成25年度決算、事業・活動報告案
(鈴木晴彦理事、前事務局局長)
- ▽平成25年度決算案監査報告(名児耶明監事)
- ▽平成26年度予算案(高城弘一事務局局長)
- (報告)
- ▽国内局報告(萱のり子国内局長)
- ▽研究局報告(河内利治研究局長)
- ▽編集局報告(中村伸夫編集局長)
- ▽学術局報告(森岡隆学術局長)
- ▽国際局報告(なし)
- ▽会報委員会報告(高城弘一会報委員長)
- (連絡)
- ▽大会日程等説明(下野健児開催運営委員長)
- ▽事務連絡(高城弘一事務局長)

本年度の第25回大会は、平成26年9月13日・14日の両日、花園大学自適館300教室において開催された。初日冒頭、例年通り本年度総会が開催された。

総会は、高城弘一事務局長の司会と開催の辞ではじまり、花園大学・細川景一学長による開催大学代表挨拶、澤田雅弘理事長の挨拶に続き、萩信雄諮問委員を議長に選出して議事に入り、以下の議事及び報告がなされた。なお、議事については、いずれも満場一致で可決された。

※なお、「平成26年度事業・活動計画(案)」は、総会時に提示できず、本紙5面に掲載。

(議事)

国内局

・本年度は、若手研究会と鑑賞セミナーの開催を見合わせ、大会の開催に一本化して活動してきました。花園大学の大会実施内容については、開催校からの報告をご覧ください。

・現在、学会員による今年度の研究成果を調査しています。とりまとめて、誌上での報告を行う予定です。局内で情報の共有と交換ははかれるように幹事名簿を整理しました。役割分担をはかりつつ、研究活動の活性化につながる試みを実施していきたいと考えています。ご意見ご要望がありましたら、国内局までお寄せください。

(国内局長 萱 のり子)

国際局

本年度は、中国大陸(1)・台湾(2)・韓国(2)の博物館・美術館で開催される書画に関する特別展・常設展について、各施設がウェブ上で提供している情報にすぐアクセスできる展覧会案内をホームページに掲載しました。

また、佐々木佑記氏より香港中文大学の博物館で開催されていた香港の実業家・李榮森(一九一五～二〇〇七)の旧蔵品展「北山汲古―中國書法」の鑑賞後記をいただき、あわせて掲載しました。今後は欧米の動向も視野に入れながら、情報を発信したいと思えます。

(国際局長 富田 淳)

学術局

J-STAGEについて

昨秋刊行されました学会誌『書学書道史研究』二十四号について、前号同様、半年後の本年四月頃にJ-STAGE(ジェイ・ステージ)に搭載できるよう、努めています。なお公開時には、学会ホームページでお知らせいたします。

データベース「学会名鑑」について

昨秋の学会総会でもお知らせしましたが、日本学術会議・日本学術協力財団・科学技術振興機構連携の標記データベースに、当学会が掲載されました。折々に更新してまいります。

なおリンク先のリサーチマップには、各自で登録していただけますよう、お願いいたします。

<http://gakkaui.jst.go.jp/gakkaui/control/toppage.jsp>

東洋学・アジア研究連絡協議会について

書学書道史学会など三十三の正会員学協会とオプザーバーの三学会から成る右記協議会の二〇一四年度総会が、十二月十三日(土)に東京大学法文二号館で開催され、シンポジウム「東洋学・アジア研究の新たな振興をめざして」(本学会ホームページで既報)も開催されました。

(学術局長 森岡 隆)

研究局

平成二十七年「特定領域研究促進助成金制度」の募集をします。会報二十六号でお知らせしましたが、正式に理事会・総会の議を経て、応募様式を従来比1/2近くまで大幅に簡略化し、応募期間を一週間に変更しました。これらの変更は会員諸氏による多く

の応募を期待してのものです。(残念ながら平成二十六年度は一件の応募もありませんでした。)学生会員の募集も可能ですので、ふるって応募ください。

■申請受付期間：平成二十七年六月一日(月)～六月七日(日)

■詳細はホームページの募集要項をダウンロード(Word形式)してご覧ください。

■問い合わせ先：shogaku@univcoop.or.jp

■問い合わせ方法：Eメールのみ(平成二十七年年度特研助成問い合わせ)とご記入下さい。

この「特定領域研究促進助成金制度」の募集は、平成二十七年を最終年度といたします。平成二十八年より、研究領域に制限を設けない「研究促進助成金制度」として新たに発足する予定です。詳細につきましては、今後、学会ホームページ、会報等にてお知らせいたします。

なお平成二十六年から研究局事務のメンバーが入れ替わりました。永由徳夫副局長はそのままですが、幹事に権田瞬一・角田健一両氏、局長に河内が就任しました。第一回研究局会議を七月十七日十七時から大東文化大学において開催し、上記計画書の簡素化や新しい助成金制度について話し合いました。今後ご意見等がございましたら、ご連絡下さいますようお願いいたします。

(研究局長 河内利治)

編集局

例年通り学会誌『書学書道史研究』の編集と刊行が編集局としての主たる業務です。昨年十月中旬に、ほぼ一昨年同様の予算で第二十四号を刊行することが

できましたが、すでに学会ホームページでもお詫びして訂正しましたように、金子馨氏の論文タイトル(表紙と中扉に不要なサブタイトルが誤って印刷されてしまいました。最終校正の段階での私たち編集担当者の不注意が、このような結果を招いたことを重く受け止め、再発防止につとめる所存です。

第二十四号では、従来の「会員研究動向」にかえて、試行的な新企画「学界展望」をもうけました。「重点的に取り上げるべき成果」の「検証と評価」により「今後の研究のあり方」を模索するというのが、この企画の目的と趣旨です。従来の「会員研究動向」に類する内容を、学会ホームページでの恒常的情報発信に切り替えるための諸課題をふくめ、この新企画の次号以降のあり方については、常任理事会等で検討することになっていきます。

今年秋に刊行する予定の第二十五号では、査読を経た投稿論文・研究ノートをはじめ、昨年九月に花園大学で開催された大会での特別シンポジウムについても詳しく取り上げる予定です。学会誌の投稿規定と執筆要領については本学会のホームページをご覧ください。なお、編集局の活動に関してご意見ご要望等がありましたら、編集局長宛てにお知らせ願います。

(編集局長 中村伸夫)

事務局・会報委員会公告

〔平成26年度事業・活動計画(案)〕

- 5月1日 第27号《会報》発行及び発送
- 6月中旬 第25回大会発表申込締切
- 6月下旬 第13期大会1回常任理事会
- 8月初旬 第24号《学会誌》発行及び発送
- 8月初旬 《大会最終案内》

《大会レジュメ集》発行及び発送

- 8月下旬 平成25年度会計決算監査
- 9月13日 第58回定例理事会(於花園大学)
- 9月13日 第25回大会1日目(於花園大学)
- 9月14日 第25回大会2日目(於花園大学)
- 12月31日 第25号《学会誌》投稿申込締切
- 1月15日 第28号《会報》発行及び発送

〔平成27年度・第26回書道史学会大会会場(予定)のお知らせ〕

毎年、書道史学会大会は、西日本、東日本と会場を交互に移して、実施してきました。平成26年度は、花園大学(西日本)での開催により、平成27年度は、東日本において開催します。理事会等の推薦もあり、橋本貴朗幹事の本務校である國學院大學(東京都渋谷区)で開催の予定です。新年度にならないと、会場の確保が難しいということから、開催日については未定です。ご承知おき下さいますようお願いいたします。

〔学生会員から一般会員の手続について〕

学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。この制度は、学生会員(学生会費適用の方)が大学院を修了、もしくは満期退学・自主退学、その他の理由により学籍を失った(学割証の発給対象でなくなった)時点で、学生会員資格を、一旦終了とするものです。該当の方が引き続き本学会会員に留まろうとする場合、以下の会員変更手続が必要となります。会員変更手続きの用紙が、学会ホームページにアップしてあります。ホームページ右の「入会申込書」を選択し、「会員変更申込書」をダウンロードして、必要事項を記入の上、学会事務局へ送付して下さい。

また、当該会員手続きは、届け出制度となっており、ため、理事会での資格審査はありません。したがって、

書類提出のみで学生会員資格の終了時点から自動的に一般会員資格が付与されます。

今春に学生会員資格を失う方は、早めに手続きをお願いいたします。送付先は左記のとおりです。

《事務局の連絡先》

〒166-8532 東京都杉並区和田3-30-22

大学生協学会支援センター内

書道史学会事務局

☎ : 03(5307)1175

FAX : 03(5307)1196

メールアドレス stogaku@univcoop.or.jp

※電話での応答は「大学生協学会支援センター」となります。

支援センター内の学会担当者:井手富士雄

(事務局長・会報委員会委員長 高城弘一)

新入会員紹介 事務局

〈一般会員〉

- 大屋正順 大正大学非常勤講師
- 富川展行 大阪教育大学附属平野小学校非常勤講師
- 佐藤文字
- 川崎宏祐 熊本セントラル病院
- 林 淳 勝山城博物館学芸員
- 中村寿樹 雲雀丘学園中等学校
- 〈学生会員〉
- 溝井胡桃 筑波大学大学院生
- 鈴木 清 東京学芸大学大学院生
- 多久島鈴沙 筑波大学大学院生
- 小林大泰 大東文化大学大学院生
- 李 輝 大東文化大学大学院生

※平成26年4月〜同年9月に申請された方

研究 余話

読めない文字を読む

萩 信雄

碑刻の釈読をしようとすると、読めそうで読めない文字にしばしば出合う。

もう三十年も前の、一事例について記してみよう。当時、福本雅一先生の編で『中国碑帖選』という新書版の三冊が上梓された。これは後の、二玄社『中国法書選』のもとになった本である。その中巻で筆者は、「高貞碑」と「石門銘」を担当したのであるが、前者の十三行目に、『八瓊室金石補正』がこの碑を録文して以来、空格になつていて、決着をつけねばならぬ問題であった。碑文を記せばこうである。「由是有少君退讓之風、無□淵嬌奢之患」。この□淵は何人か、なんとしても解決しなかったが、当時は時間切れで、『碑帖選』では、「□淵は何人かの字であろうが、未詳」と書かざるを得なかった。その後、あれやこれやと思考することしばしばであった。

こゝは上句と対句なので上の「少君」も何人かの字であろうと推測した。次に高貞の家系は、北魏の孝文・宣武兩帝の外戚であったことから、前代の外戚で「少君」の字を持つものがあるかどうかを調べてみた。このような時の工具書として、正史の人名索引は極めて便利である。なぜなら人名と同時に字も、正史記載のものはほぼ完璧に検索できるからである。この「少君」は、『後漢書人名索引』で難なく見つかった。その二八五頁に、「少君 寶広国を見よ」とある。『史記』外戚世家一九によると、「寶皇后兄寶長君、弟曰寶広国、字少君……於是乃選長者、士之有節行者与居、寶長君・少君、由此為退讓之君子、不敢以尊貴驕人」とあり、寶広国、字は少君は、前漢・文帝の皇后であった寶姫の弟で、年少の頃から苦勞を重ね、長じては徳行の高い長者と、節義を守る高士とともにすごしたことによつて、謙遜な君子となり、高貴の身を人に驕つたりはしなかつた、という。「少君」は間違ひなく寶広国であることがわかる。別の角度からも検索しようとするればできる。多くの書物の中から、事項や語句を分類・編集した

類書もしばしば役に立つ。康熙勅撰の『淵鑑類函』の帝戚部・外戚の項に、「兄弟退讓」の句があり、『史記』外戚世家のこの文を引用している。さらに熟語を末尾の字韻によつて分類配列し、出典を示している『佩文韻府』の「退讓」の条にもまた、『史記』のこの文が引かれてあつた。

さて問題の「□淵」であるが、読めそうで読めないのは、図版を見ていただければおわかりになるだろう。数種の拓本の影印本にあつてじっくり見ると、どうも「長淵」ではないかと思えてきたが、文字の印象によつて、ただぼんやりとそのように見えるというだけでは、論拠にならない。そこで、「少君」と対句であることから、同様に外戚中の人物を検索したが、結局は徒勞に終つた。結果からいふと、外戚にとびついたのが、まずいけなかつた。後日、何気なく諸橋の『大漢和』を見ていると、その十一巻の「長」の項に、「長淵 南朝宋・顔師伯の字」とあるではないか。灯台もと暗し、とはこのことだ。早速、『宋書』卷七七の顔師伯伝にあつてみると、「師伯居權日久、多納貨賄、驕奢淫佚、為衣冠所疾」とあり、まさしくこれは顔師伯の字に相違なかつた。「少君」の方はどうであろうかと、『大漢和』を引くと、これも寶広国の字とでていた。収録語彙の多いこの辞典は、なるほど便利ではあるが、語彙採録の基準は一樣ではなく、いつもまい具合に見つかるとは限らない。ちなみに『淵鑑類函』では、顔師伯のことは「龍幸」の項に見えるが、『佩文韻府』にあつては、「驕奢」の語は採られているものの、『宋書』顔師伯伝の文は録されていなかった。

何とも無駄な話ではあるが、パソコンの無かつた昭和の時代がなつかしい。



高貞碑

点視

北大漢簡『老子』の隸書について

矢野 千載

出土した木簡等のことを地下からの贈り物という言い方があるように、古代の簡牘帛書の文字資料が発見されると、日本・中国を問わず気になるものである。専門分野により、新出土文字資料の何に着目するかは異なるであろうが、書に携わる者としては、書体の変遷をあとづける字形や、文字から視覚的に感受される書美に関心が向かう。

現在取り組んでいるものに、北京大学蔵西漢竹書というものがある。改めて書いてみると、その実態が何とも分かりにくい名称であるが、その名の通り、北京大学が所蔵する前漢時代の竹簡の書のこと、よく北大漢簡と略称される。その竹簡は三千枚以上にも達し、保存状態がよく、内容は古代の書籍に属するものである。竹簡名に地名ではなく大学名が付されたのは、それが盗掘品で中国外にまで持ち出された末、北京大学に寄贈された経緯があり、出土地の特定が困難であったからであろう。竹簡名に所蔵先が付される同様の例は増加傾向にある。

この北大漢簡は二〇〇九年に北京大学の所蔵となり、二〇一二年には最初の図録、『老子』が書かれた二二一本の竹簡のカラー写真が『北京大学蔵西漢竹書』二として刊行された。

北大漢簡に興味を持ったのは、その書法が優れていたこと言うまでもないが、その隸書が今まであまり見たことのない字形で、新鮮な驚きがあったからである。『文物』二〇一一年一六、『書法叢刊』二〇一一年一四に、書風の異なる九種の書籍の竹簡が掲載され、興味深く見た記憶がある。その書写年代は漢の武帝

後期と推定されており、よく考えてみるとその時期の隸書の遺例は少なく、類似する書風が少ないのも当然なのである。

さて、この北大漢簡『老子』の各文字を確認していたところ、隸変の観点から面白い字例が幾つかあったので、その一つをここで紹介したい。



一例として「安」字を挙げる。「安」字は篆書や隸書では、文字の右側に斜線が書かれるかどうか気になる文字である。その斜線は、説文篆文にはないものの、石鼓文・権量銘・睡虎地秦簡・馬王堆帛書・孫臏兵法には書かれることが知られる(新井光風「秦始皇時期の肉筆『書道研究』一九九〇—三」。しかし、八分様式が確立した隸書では書かれなくなるの言うまでもない。

北大漢簡『老子』には「安」字が十二回出てくるが、全字例ともその斜線に該当する点のような払いのような筆画がある。字例によつてその筆画に気付きにくいのは、それが「女」の一画目の延長線上に書かれているからである。挿図を見ての通り、その筆画がいつの間にか「女」の一部として認識されるようになれば、省略されても自然なことと思われる。

このようにして、楷書と同じ筆画数の「安」字に変容したと考えられるが、そう単純な話でもない。というのも『木簡字典』所収の居延漢簡の字例には、「女」の横画を右下に払い出す字形があるのだが、これは「女」の横画と斜線の二画をまとめて書こうとした字形と考えられる。つまり、右側の斜線のことをまた忘れてはならず、完全に省略する前の段階の字形ではないかと考えられるのである。

松花堂昭乗と草庵「松花堂」

川畑 薫

学生の頃から松花堂昭乗に興味を持ち、以来研究テーマの中心となつている。

松花堂昭乗は江戸時代初期の石清水八幡宮の社僧で、書画、茶の湯などの諸芸に通じた教養人であった。ことにその書は後世「寛永の三筆」のひとりに数えられる。昭乗の書はおおよそ穏やかで明るい雰囲気にも包まれている。この傾向は、晩年の書において増しているのではないだろうか。

昭乗は自らの最期を思い、寂靜の境地を求め、草庵「松花堂」を建てて隠居した。亡くなる二年ほど前のことである。現在、草庵は松花堂庭園に移築されている。私の勤務先だ。二畳ばかりの小さな空間で昭乗は何を思ったのだろう。やはり生きることが愛おしいと思ったのではないだろうか。晩年の書にはそういった愛おしさが表れているように思う。

教育の力

杉山 勇人

いま、小・中学校の書写の授業はどうなつているか。百円ショップで筆と「インク」を買い、残りの半紙を数えて授業をやり過ぎ、洗えない筆と硯は固まったまま。そんな現状が聞こえてくる。子どもたちに毛筆文化を伝える環境はなかなか整わない。このままでは十年後の書写教育に未来はあるだろうか。

子どもたちがはじめに文字に、そして書に興味をもつのは教育の力である。一般的な書のイメージ、社会的な位置づけは教育によつて形成される。私が書写書道教育史の研究をしようとしたきっかけはここにある。書の個人的な美意識でなく、社会における共通認識を取り出そうと考えている。研究の世界でも、こうした小・中学校の現実を直視しなければなるまい。研究のための研究に終わることなく、社会に発信していきたいと思う。

東京文化財研究所所蔵拓本の公開

高橋 佑太

勤務先の東京文化財研究所は、約四七〇〇枚の拓本を所蔵しており、その内容は日中韓の美術工芸品、碑文や仏像、画像石など多岐にわたります。これらの目録は既に完成し、二〇〇八年刊行の『東京文化財研究所七十五年史』に収録しています。公開に向け、現在、その整理を担当しています。

まずは美術史家、中川忠順（一八七三～一九二八）旧蔵の龍門石窟造像記の拓本約一七〇〇枚の整理から始めましたが、勿論、龍門二十品のような著名なものばかりではありません。なかには草卒に書かれたものや稚拙な味わいをそなえたものもあり、いくら眺めていても飽きることはありません。準備が整い次第、研究所のホームページに目録を掲載する予定です。

版本本の調査から

山口 恭子

江戸時代出版された手本には、かつてそれに学んだ人々の痕跡が残されている。近頃行なつた瀧本流手本『和漢朗詠集』の伝本調査でも、訓読を書き入れたもの、詩歌の収録順に関する不審を記したのも、余白に和歌を書いたもの等を目にした。

勿論それ自体は珍しいものではないが、同じ手本であっても、残された痕跡は実に多様であると再認識させられた。これらは学書の様相のみならず、彼らの詩歌の解釈、学問的な姿勢や環境、あるいは書物そのものに対する価値観等、多方面にわたる事柄を伝えている。当時の学芸の享受・流通を探究するうえで、版本手本は想像以上に大きな存在意義をもつものであろう。

江戸時代の書やその周辺文化の実相に近づくために、今後も手本に残された様々な痕跡に目を向け続けたい。

編集 後記

◆近年の中国書道関連雑誌は、新出資料や興味深い論考も多く随分と充実しています。通勤中に熱中して読んでいたら、降りる駅を通過してしまいました。（小川）

◆一月に第四十回卒業制作展を迎える学生達は、心待ちにしていた入学式が東日本大震災で中止となった。学長にお願いして「贖」の一文を頂き八名で調和体の作品を仕上げた。早、四年……（柿木原）

◆古書目録で藤原行成を画材とした錦絵

を目にし、美しさは勿論、説話を踏まえた描写や巧みな技法で表現される線に惹かれ、つい購入してしまいました。人気絵師の作品を買い求めた古人の気持ちを感じ取れたような気がします。（金子）

◆昨年は、より多くの経験を積むことを自らに課した一年であったが、ある程度狙いどおりにできたように思う。同時に、もつとできたのではとの思いも残した。新しい一年はどんな経験を積むことができるのか今から楽しみである。（野中）

◆昨年度より、ある高等学校で「日本の伝統文化」という授業の一環として書き初め指導を担当しております。当初は僅か一日だけの試みでしたが、今年度は一、二年生を対象に事前指導を含め五回行うことになりました。筆を初めて持つ生徒が大半を占め、悪戦苦闘の連続ですが、純粹に書くことを楽しみ夢中になっている姿に接し、書始めた頃を思い出す今日この頃です。（藤森）

◆昨秋開催された展覧、「名画を切り、名器を継ぐ」（根津美術館）や「東山御物の美」（三井記念美術館）。多くの作品に魅了されるとともに、日本独特の鑑賞スタイルを実物から窺える貴重な機会となりました。（六人部）

◆十一月二十四日、二十五日、和紙の大産地・福井県越前市での開催、和紙文化講演会・交流会・紙漉工房訪問などのイベントに参加してきた。前後して、和紙が無形文化遺産に登録されたが、使うことによつて伝統を支えられるんだと、改めて実感した次第。（高城）